

中学生と現実原則

藤沢 伸介

学業成績に関する研究をしていて、とても不思議なことに気付きました。研究対象となった八〇〇名程の中学生の中で、家が酒店を営んでいる例が六件あり、いずれも男子ですが、例外なく成績優秀でした。このことから、酒屋さんの御息は必ず優秀であるなどと断定することは出来ませんが、単なる偶然だとは片づけられない気が致します。

中学生といえば、男子は二年生頃に停滞期を迎え、たるんだ毎日を送る時期が続くのが普通ですが、この酒屋さんの御息達は、いずれも停滞期が非常に短いのが特徴です。「目標は、犠牲を払わなければ達成出来ない」ということをよく知っていて、勉強もとても頑張ります。いつも、自分の行動の意味を考えながら毎日を送っているという感じがありました。

この共通点はどこから来るのかに興味を持った私は、彼らの日常生活のことを尋ねてみました。そしてわかったこ

とですが、彼らは実によく店の手伝いをしていました。単なる接客だけでなく、在庫管理、伝票整理、配達の手伝い、そして閉店後の後始末に至るまで、深夜まで正規の従業員のように、働いていました。ですから、学習時間も遊びの時間も他の中学生に比べると、はるかに少ないようでした。私は、これだと思いました。彼らは、中学生にして労働の意味を知っているのです。生活をしていく為には、どれだけつらくても我慢しなければいけないことがあるのかが、分かっているのです。彼らの学習意欲は、ここから出ているようでした。

「犠牲を払わなければ、目標の達成は出来ない」という原則は、精神分析の領域では、「現実原則」と呼ばれます。短絡的に快を得ようとする「快楽原則」と並んで人間の行動を支配しています。「蟻とキリギリス」の話では、蟻が現実原則に従って行動し、キリギリスが快楽原則に従って

行動していると考えるとかわりやすいと思います。人間の場合、赤ん坊の時には快樂原則に従うだけですが、大人になると必要に応じて現実原則での行動が可能になります。余り専門的なことには立ち入りませんが、この両方の原則は、どちらが良いとか悪いという問題ではなく、結局人間はこの二つの原則のバランスを取りながら社会に適応していると、精神分析の領域では考えています。

我々は働かなければ収入を得ることは出来ません。練習をしなければピアノをうまく弾くことも出来ません。誠意を尽くさなければ人の信頼を得ることも出来ません。それを犠牲と考えるか過程の楽しみと考えるかは、人によるでしょうし状況にもよるでしょうが、いずれにせよ何らかの努力があつて初めて目標が達成されるのであつて、何もせずに棚ぼた式に幸せが獲得出来るものではないことを我々は知っています。

しかしながら、中学生の多くは、大人にとって当たり前のことがよく分かつてはいません。「もっと良い成績を取りたい」と口では言っているが、そのために必要な努力をしないのが良い例です。大人の基準で考えますと、「努力をしないとところを見ると、『良い成績を取りたい』と言っていたのは口先だけの言い逃れで、本当は勉強をやるのが嫌なんだろう。」ということになります、当の中学生にしてみれば、言い逃れのつもりはないのです。

中学生がなかなか現実原則がつかめないのはなぜでしょうか。これは、中学生にとって重大な問題の殆どが、現実原則にあつていない為です。中学生の時期には体が大きく変化して、大人の体つきに近づきますが、これは身体の成熟によるもので、本人の努力とは無関係です。遊びの計画が実施されるかどうかは、宿題の量、親の許可、当日の天候などによって左右され、これ又、本人の努力とは無関係です。自由になるお金の額も、どこの家庭に生まれ育ったかによるのであつて、本人の努力とは余り関係ありません。第一、日本の子供は、全く働かずに食べるものと寝る場所が親から保証されているわけで、これも現実原則にあつていません。こういう生活を毎日送つていて、現実原則が体得出来ないのは当然とも言えるのではないのでしょうか。

平均的な日本の中学生の生活において、唯一例外的に現実原則に従うのが学習です。学習だけは、努力して学習量を増やせば成績が上がっていきますし、怠ければすぐに成績は落ちてしまいます。しかも、努力の量を自分で調節出来ます。ですから、現実原則を体得するには、学習が最も良い材料と言えるかもしれません。しかしながらなかなか体得出来ないのは、中学生にとって例外的なことだからです。学習を通じて現実原則を体得するには、非常に努力して良い成績をとる経験と、怠けて最悪の成績をとる経験の両方が必要でしょう。その為には、その毎回の試験準備状

況が記録されていて、本人が自分の学習状況を後から反省出来るようになっていることが必要です。又、親が不勉強を非難し過ぎると、子供は過度に防衛的になって、自己反省をしなくなりませす。

その日の食べ物確保する為に子供が働くと言う後進国に比べ、日本の子供達は恵まれていると言えるかも知れません。しかし、現実原則を学べるのは教科の学習だけと言う状況は、決して恵まれているとは言えないと思います。これでもし、受験制度がなくなりでもしたら、そら恐ろしい限りです。

ここで、学習を通じてゆっくりと現実原則を体得すれば良いという考えもあるかも知れません。しかし、早く現実原則を体得させて、学習を成功させたいと考えるのであれば、現実原則を体得出来るような対策が必要になります。

そこでヒントになるのが、冒頭で述べた酒屋さんの御息の例です。単なる使い走りでない、責任を必要とするような家の手伝いをさせたり、親が安心出来る場所なら、積極的にアルバイトを認めてあげることが必要です。こづかいを不労所得でなく、簡単な労働の報酬の形に変えていくのも効果があると考えられます。又、子供が人に迷惑をかけた時に、親が代わりに謝るのではなく、本人にきちんと責任をとらせることも大切です。又、学習する時も、市販の暗記材料や要点集を利用したり、ワークブックに記入す

るだけの学習をするのではなく、面倒でも、暗記材料を作ったり、自分で辞書を引くような学習を積み重ねることが必要です。現実原則の体得にも現実原則が働いています。

(ふじさわ しんすけ・教育心理学)